

◆ ◆ 共済事業にかかる認知度等調査報告書のポイント ◆ ◆

日本共済協会は、共済事業が広く国民の支持を得て発展するために必要な知見を求めることを目的として、共済理論研究会主査の日本大学商学部岡田太教授の監修のもと 2021 年に「共済事業にかかる認知度等調査」をインターネット調査により実施しました。

今回が初めての実施となった本調査では、共済・保険の利用者を含めた広く一般の方約 4,000 人を対象とし、日本在住の 20～60 歳代の男女の生活・消費における価値観、協同組合・共済、助け合いにかかる意識等を調査しました。調査項目の設定に際しては、多様な共済種類を取り扱う会員団体に共通する事項を検討し、当協会独自の内容となるよう留意しました。

同調査の結果における主なポイントを次のとおりご紹介します。

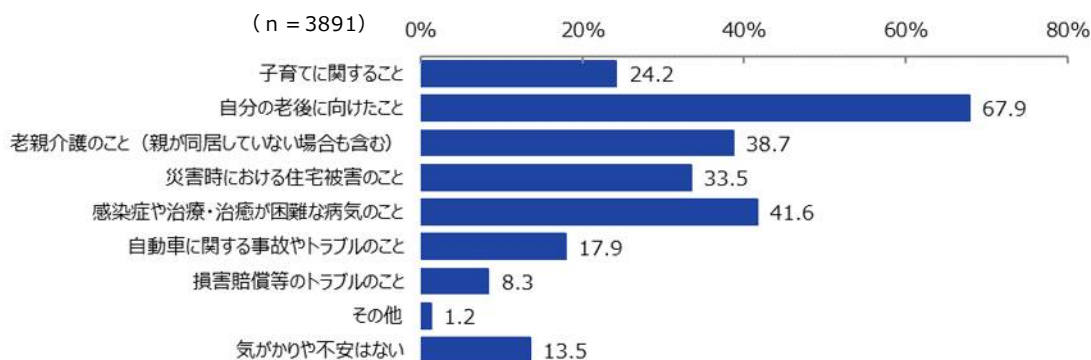
1. 日常生活の気がかりや不安

共済や保険は、生活のリスクに備えた保障を準備し、安心を得るためのものである。そこでまず、人々がどういったことに不安を感じているかを、共済や保険が保障の対象とする事項を中心に確かめた。

日常生活における気がかりなことや不安に思うことについて聞いたところ、約 7 割が「自分の老後」、約 4 割が「感染症や治療・治癒が困難な病気」「老親介護」に、約 3 割が「災害時における住宅被害」に気がかりや不安を抱えているという回答であった（図表 1）。

誰もが迎える老いや老親介護が多くの人の心配ごととなっている。また、調査時には新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっており、感染症や病気への不安は、約 4 割を示している。

◆ 図表 1 日常生活での気がかりや不安（複数選択）



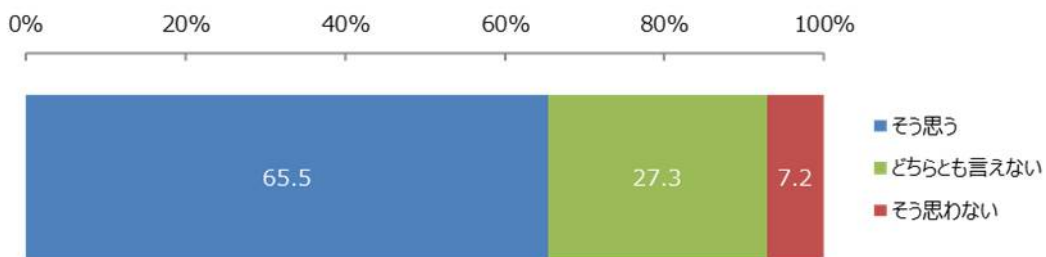
2. 助け合いの重要性の認識等

(1) 助け合いの重要性の認識

共済や保険は、助け合いや相互扶助であるという言い方をされることがあり、特に共済の仕組みは助け合いの精神から始まったと言われている。そこで人々が助け合いについて、どう考えているのかを確かめた。約7割の人が自分にとって助け合いは重要であると思うと回答している（図表2）。

◆ 図表2 助け合いの重要性

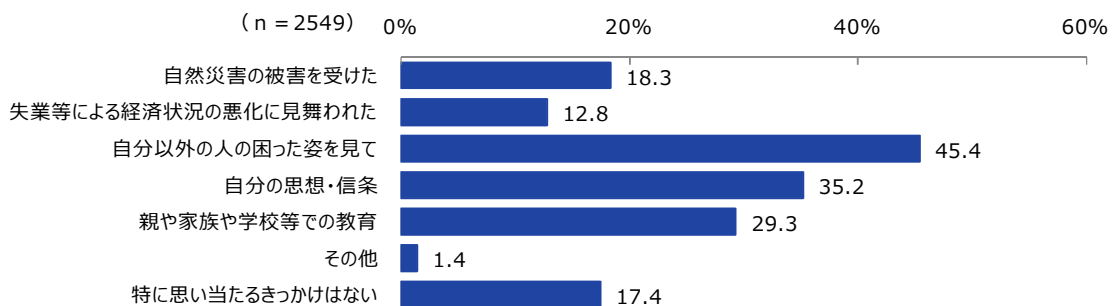
(n = 3891)



(2) 助け合いが重要と考えたきっかけ

助け合いが重要であると回答した人に、さらに助け合いが重要だと考えたきっかけを聞いたところ、5割弱の人が「自分以外の人の困った姿を見て」、4割弱の人が「自分の思想・信条」、約3割の人が「親や家族や学校等での教育」と回答した（図表3）。自分以外の人の困った姿を見た経験をきっかけとする割合は最も高く、次いで思想・信条、教育が高い割合を示している。自分が直接被害を受けたという選択肢よりも、誰かが困っている姿を見たからという選択肢の割合が高く、これは実際に自然災害などの被害を受けた経験を持つ人が少ないことが理由であるとも考えられるが、自分の直接的な体験や経験がなくても、困っている人の姿を知っているということが助け合いの重要性の認識に大きく繋がっていることがわかった。

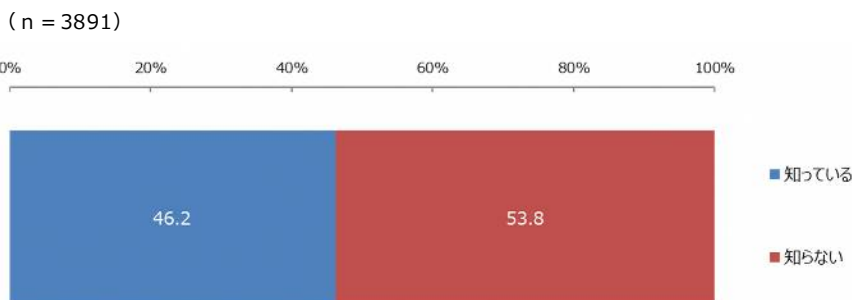
◆ 図表3 助け合いが重要だと考えたきっかけ（複数選択）



3. 組合員加入が必要であることの認知

共済や保険は、リスクに備え、保障を提供するという同様の役割を担っているが、主な違いの一つとして、協同組合が行う共済に加入するには組合員であることが必要であることが挙げられる。そこで、共済に加入する際には原則として組合員であることが必要であることを知っているかどうかを聞いたところ、「知っている」と回答した人は、「知らない」と回答した人をやや下回るものの、約5割の人が知っていると回答した（図表4）。

◆ 図表4 共済加入には組合員であることが必要だと知っているか



4. 共済・保険の加入経験と契約検討の際に重視した情報

(1) 共済・保険の加入経験の有無

本調査は、共済や保険の利用者だけに限ったものではなく広く一般の方を対象としており、共済・保険への契約経験の有無および契約をしたことがない人については加入にかかる検討経験の有無を確かめた。その結果、約7割の人が「契約をしている、もしくはしたことがある」と回答し、約2割の人は「検討自体をしたことがない」と回答した（図表5）。

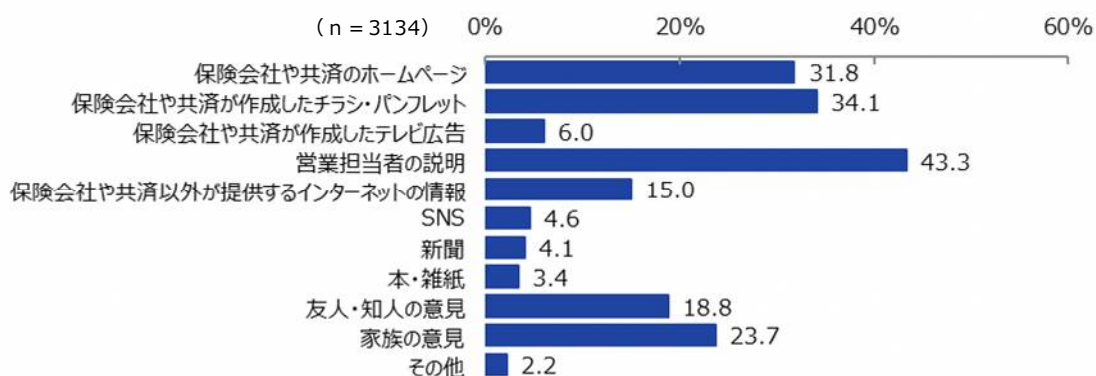
◆ 図表5 共済・保険の加入経験の有無



(2) 契約検討時に重視した情報

共済・保険の契約をしたことがある人および契約の検討をしたことがある人に、契約を検討した際に重視した情報を聞いたところ、約4割が「営業担当者の説明」、約3割が「保険会社や共済が作成したチラシ・パンフレット」「保険会社や共済のホームページ」と回答した(図表6)。また、約2割が「家族の意見」「友人・知人の意見」と回答した。契約の検討時には、作成元がはっきりしている公式の制作物が重視されている割合が高く示されている。

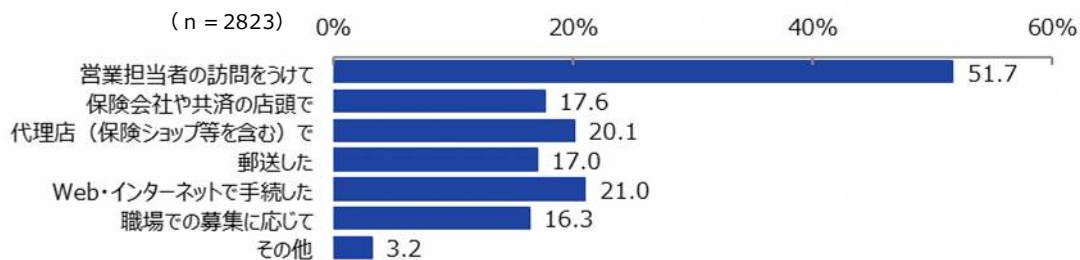
◆ 図表6 共済・保険の契約検討時に重視した情報(複数選択)



(3) 共済・保険の契約をした場面

共済・保険の契約をしたことがある人に、その契約をした場面を聞いたところ、約5割が「営業担当者の訪問をうけて」と回答した(図表7)。次いで、約2割が「Web・インターネットで手続きした」「代理店(保険ショップ等を含む)で」「保険会社や共済の店頭で」と回答した。

◆ 図表7 共済・保険の契約場面(複数選択)



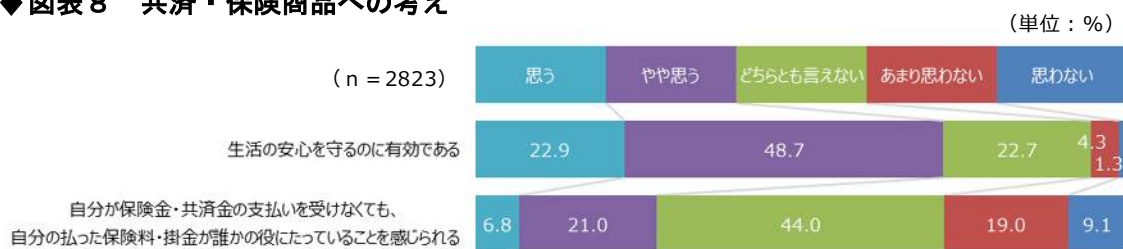
5. 契約している共済・保険商品への考え

共済や保険の契約をしている人へ、実際に契約している共済や保険のうちの最も新しい契約（すべて解約した場合は最後に解約した契約）についての考えを確かめた。

契約している共済・保険の商品が「生活の安心を守るのに有効である」と思うかについては、約7割の人が有効であると「思う・やや思う」と回答した（図表8）。

また、「自分が保険金・共済金の支払いを受けなくても、自分の払った保険料・掛金が誰かの役に立っていることを感じられる」という助け合いに関係する問いについては、約3割の人が「思う・やや思う」と回答した。

◆ 図表8 共済・保険商品への考え



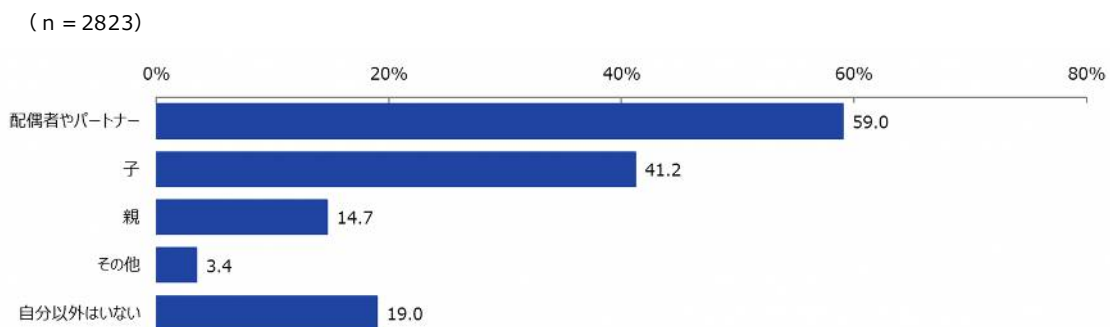
6. 共済・保険に入るのに「自分以外」では誰のリスクを考慮したか

(1) 誰のリスクを考慮して共済・保険に加入するのか

共済や保険は、偶然に発生する事故や傷病などによって生じる自分や関係者のリスクに備える制度である。そこで、共済や保険の契約をしたことがある人に、契約する際に、「自分以外」では誰のリスクを考慮したかを確かめた。

約6割が「配偶者やパートナー」、約4割が「子」と回答した（図表9）。また、約2割は「自分以外はいない」と回答した。

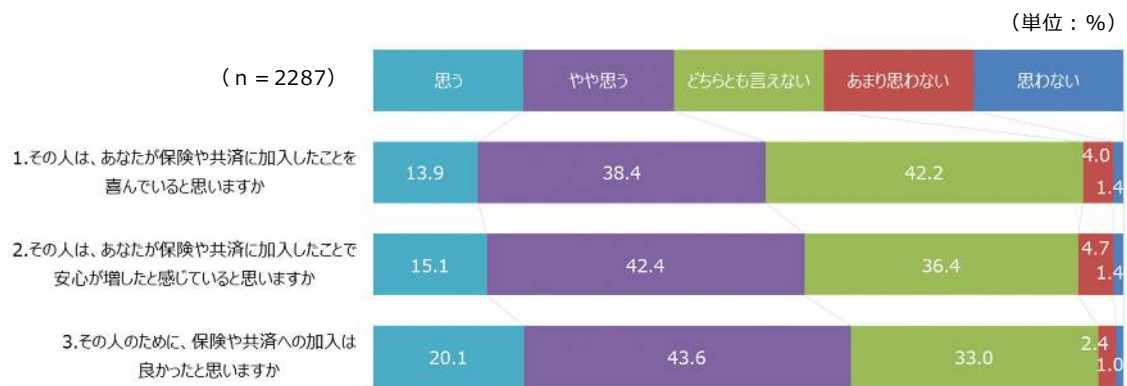
◆ 図表9 共済・保険契約時に誰のリスクを考慮したか（複数選択）



(2) リスクを考慮した人（自分以外）のために加入して良かったと思うか

共済や保険の契約をした経験があり、契約する際に「自分以外」の誰かのリスクを考慮した人へ、その人（相手）のために共済や保険に加入して良かったと思うかなどについて自己評価を聞いたところ、約5割の人がリスクを考慮した相手は「喜んでいると思う・やや思う」と回答し、約6割の人が、リスクを考慮した相手は「安心が増したと感じていると思う・やや思う」、また、リスクを考慮した相手のために「保険や共済への加入は良かったと思う・やや思う」と回答しており、肯定的な意見が多いという結果となった（図表10）。

◆ 図表10 共済・保険契約時に自分以外のリスクを考慮した人の自己評価



■ 調査概要

調査名：共済事業にかかる認知度等調査

調査期間：2021年3月2日～3月5日

調査方法：公益財団法人日本生産性本部によるインターネット調査（楽天インサイト株式会社の所有モニターに対する調査）

調査対象：20～69歳の男女（日本在住者）とし、性別、年齢別（10歳ごと）、都道府県別に、国勢調査（2015年）の人口構成比に基づき比率配分

有効回答者数：3,891人

監修者：日本大学商学部教授 岡田 太